

京都大学地理学談話会

会 報

第 8 号



*Englishmen trading with North American Indians, copper engraving, c. 1634
from Historia Americae by Theodor de Bry.*

1 9 9 7

寄稿

＜創設 90 周年特別寄稿＞

終戦時の地理学教室

織田 武雄（名誉教授）

明治 40 年に地理学教室が設置されてから、今年で 90 年を迎えることになり、その間の教室の歩みについては、米倉先生をはじめ、いろいろな思い出を寄せられていると思われるので、私は終戦時の地理学教室について少し書き止めて置き度い。

昭和 20 年の終戦とともに、地理学教室は一時空席のままとなっていたので、東洋史の宮崎市定先生が地理学講座を兼任されることになった。しかし、終戦翌年の 21 年には、應召されていた学生も次々を帰学し、それに在学中の学生も繰上げ卒業となったので、文学部では臨時措置として、履修科目の単位は問わず、卒業論文の提出をもって卒業と認定することになった。そのため宮崎先生は東洋史と地理学専攻の学生の卒業論文の審査をされることになり、余りにも多数になるので、地理学の卒論は、私が非常勤講師として、審査のお手伝いをするようになった。

私は昭和 7 年卒業以来、関西学院高等商業学校に奉職していたが、終戦で廃校となったので、戦後は立命館に採用して頂くことになったが、学部には藤岡謙二郎教授が居られたので、私は当時あった専門部の地理学科の授業を担当することになった。

ところが京大の地理学講座を宮崎先生がいつまでも兼任することができず、専任者が必要となったので、翌年には立命館は僅

か 1 年だけで、私が地理学講座の助教授として就任することになった。私が関西学院の高商で受持っていたのは、商業地理という副科目的な学科であったばかりでなく、間もなく戦況が苛烈になるにつれ、阪神間の軍需工場や造船所などに、学生を率いて勤労働員に駆り出されて授業どころではなく、やっと立命館に就職してから、地理学全般の授業をすることが出来たのである。したがって私のようなものが、地理学教室の責任者としての大任を果たし得るかは全く自信がなかったので、堅く辞退したのである。しかし専任の担当がいなければ、講座の存廃にもかかわると伝われ、また卒論審査ではじめて宮崎先生の警咳に接したのであるが、先生の学殖は深く広く、ヨーロッパの古地図を多数蒐集されているなど、地理学にも多大の関心を有して居られることを知り、この先生のもとならと、敢えて教室再建の重責を引き受けることを決心した。それに私が入学当時助手であった吉田敬一さんが、教室の現状を憂いて態々長崎から上京されて、再び助手として教室の事務をとって居られたので、老練な吉田さんと一緒ならと伝う安心感もあった。

しかしいざ就任してみると、学力も研究歴も乏しい私にとって先ず当惑したことは、矢張り講義であった。文学部の旧制度では、1 回生には講座担当の教授が行う普通講義であったが、それを私が担当することは誠に面白いことであった。それにまだ教養部もなかったので、講師の先生方の援助はあったにしても、2 回生以上の特殊講義や演習、外書講読などをしなければならず、また立命館の専門部の授業も後任者がなく、そのまま継続となったので、私の授業時間

は周 22 時間となった。そこで専門部の授業時間を少しでも減らしてもらうため藤岡先生に相談したところ、授業の至ってお好きな先生なので、自分は今周 26 時間持っているが、夜間部を加えて 30 時間くらい増やしてもよいとのことだったので、ただただ恐れ入って引き退った。しかし私も旧制高校での 3 年間の寮生活で、成績はいわゆる低空飛行だったが、授業をばれないようにサボることは巧みだったので、周 22 時間の授業も休講などを交えて、何とか誤魔化した。今考えてみても、授業内容など、おそらく汗顔のものであったろう。

また地理学教室はこれまでにない多くの学生数となったが、新しい教室を纏めるのに、地理では実習旅行が利用できた。ただ戦後なので多数が宿泊出来る場所を探すのは難しかったが、吉田さんが近江八幡町史を編纂されていたので、吉田さんの顔で立派な旅館を紹介して貰ったので、宮崎先生にも御参加を願って、近江八幡に 1 泊 2 日の実習旅行を試みる事が出来た。米はまだ配給制であったので各自持参であったが、食糧難の時代に旅館では思わぬ琵琶湖の魚料理の御馳走に有りついた。宮崎先生は陸軍少尉として戦時中に應召されていたので、「君も健脚だね」と褒められて、先生の健脚を競って、長命寺から安土城へと、バスは勿論なかったので、すき腹をかかえて歩き廻った。しかし湖東地方は関西の闇米の飯場だったので、闇米は買えなかったにしても、ちょうど豌豆の収穫期だったので、ルックサックなどになどにしこたま豌豆を詰め込んで家や下宿に持ち帰ることが出来たのも、終戦時の楽しい思い出の一つである。

クラスメート

—饗餐会くとうてつかい>の事ども—

米倉 二郎 (昭和 6 年卒)

私は 1928 (昭和 3) 年文学部史学科に入學しました。当初の一年間は史学科学生として国史、東洋史、西洋史、地理、考古学の普通講義を聞いて視野を広げ、二年次から専攻に分かれることになっていました。田舎から参りました私は物珍しく見学旅行によく参加いたしました。奈良の見学会のあとでしたか同行者で饗餐会という親睦会を作りました。会員には三高出身で後に国史を専攻した赤松俊秀君、清水三男君、山口高出身の吉田三郎君、山形高出身の鈴木譲君、甲南高から西洋史専攻の金倉英一君、東洋史専攻の長部和夫君、松山高から同じく東洋史の内田吟風君、福岡高から考古学の有光教一君、佐賀高出身の私は、大阪高出身の朝井小太郎君と一緒に地理を専攻しましたが、会員の末席に名を連ねていました。

饗餐会としてのまとまった行事は金倉英一君が大類伸先生を慕って東北大に転入されるに際し送別会を開いたことを記憶しているくらいで、あまりなかったのですが、専攻を越えての友人関係は隣接科学の情報を得る便宜もあり今まで続く貴重な存在となっています。

二年生になってから地理専攻では朝井君の他、浦和高から三友国五郎君、八高だったか長谷川君が加わられました。三友君はテントをかついで 10 日間も独りで山を歩くような山男で、長谷川君はテニス部の主将でスポーツに忙しくよくノートを貸して

あげました。

国史の鈴木讓君のお父さんの世話で朝井君は鈴木君と一緒に台北商業に務められる事になり、1936（昭和 11）年夏両君と台湾を一周しました。朝井君はその後台北大学の助手となられ、戦争中海南島の調査に行かれ、戦後も中国に留用され、広東省の農事試験場におられました。1987（昭和 62）年広州を訪れ、50 年振りに朝井君に再会しました。往年の美少年今は白髪のお翁となっておられ、終日名所を案内してもらいました。一昨年から音信が絶えており無事を祈っています。

国史の吉田三郎君とは戦争中マニラホテルでお世話になりました。同君は教え子のフィリピン青年達と運命をともにされました。

三友君には戦前平壤でお世話になり戦後、鹿児島大から埼玉大に移られました。熊谷のお宅を尋ねたいと思いながら果たさずお別れする事になりました。長谷川君には箕面のお宅で一日お世話になりましたが間もなく物故されました。

有光君には慶州で独りで発掘されている時にお尋ねした事があり、金倉君には 1961（昭和 36）年ローマでお世話になりました。

饗餐会員で今尚健在なのは内田、有光、金倉、長部の諸君だけで内田君には上洛してしばしばお目にかかり、会員諸君の動静を承っております。

地理教室の追憶

河野通博（昭和 16 年卒）

その 1

太平洋戦争前夜の地理学徒の思い出

1939（昭和 14）年私は年来の志望通り京都帝国大学文学部史学科への入学を認められた。現代の熾烈な受験戦争を乗り越えて合格された学生諸君には大変申しわけないことだが我々は無試験で合格できたのであった。尤も大学に進むまでに旧制高校への入試という難関を潜り抜けてきてはいたが、実はそれも絶対落ちると思込んでいたのが、不思議にも合格するというツキのよさであっただけに、尚更肩が狭いというほかないのだが。史学科内部での専攻の決定は 2 回生からだったはずだが、殆どの学生が入学したときから志望する専攻科目を決めていた。入学早々文学部陳列館北側に在った第一教室に顔を揃えた 40 名ばかりの史学科 1 回生のうちになんと 10 人も地理学専攻志望者がいたのは我々だけでなく、小牧先生以下教室の方々にとっても驚きであつたらしい。この数は 1936 年卒業の野間先生のクラスの 11 名に次ぐ、開学以来 2 番目の多さであつた。野間先生のクラスも結構サムライぞろいのクラスであつたが、我々のクラスにも高校以来ブリキラップの異名を持つ池田光二君を筆頭に講義のないときは地理学実習室を我が物顔に占拠して喧々囂囂と議論していたのだから随分周りの方々にとってはご迷惑なことであつたろうと申しわけなく思っている。勿論 10 人全部が騒音公害の発生源であつたの

ではない。経済学部から学士入学された植村元覚氏や幕末の老中の曾孫に当たる阿部君、あるいは私と小学校以来の同級生の曾田君のような物静かな人も居たのだし、堀川君のようにハムとして当時はまだ珍しかった無線交信による情報を伝えてくれる人もいた。ま、騒音源は池田、河野、戸川、河地ということになるろうか。学習院から来た大田原君もスポーツマンらしい豪快な人で、いかにも那須野の豪族の後裔らしい人だった。もう一人の河畑くんは全く寡黙で、誰とも話をしない人であった。

さて、お昼時になると、小牧先生を先頭に室賀講師、野間助手、大学院の諸先輩、そして学生がその後にくっついて昼食に行く。行く先は百万遍の中華料理店が恒例。といっても中身は簡単な八方菜ライス程度であった。中国飯店というより寧ろ中華メシ屋というべき店だったのだが、小牧先生によればこの店が後年四条の東華菜館に変身したのだそうである。共食の楽しみもさることながら食事の間に先生方の交わされる会話から得られる情報や知識、つまりは耳学問が講義の中では得られない勉強になった。夜の一杯やりながらの学生同士の議論は今も変わらないだろうが、まだ独身で居られた室賀先生は時々山科のお宅で焼きをごちそうしてくださった。ところが2回生の秋だったかいつもの通り皆でお邪魔すると妙齢のご婦人が居られて、「これ、僕の奥さん」と、照れ臭そうに紹介された先生のお顔が忘れられない。野間先生は茶の間でドイツの新聞を寝転がって読んでいられるという神話が有っただけに学生どもには近づきがたい存在であった。本当は親切な方だったのだが我々悪童どもにとって

は近づくのが怖かったのである。

地理学教室では毎年秋に巡検旅行を実施していた。1回生のときは伊賀上野、2回生のときは三方五湖で、我々は張り切って資料を集め、プリントを作り、現地で一席弁じたり、夜も宿で大真面目で討論していたように思う。三方では、小牧先生の書かれた論文「気山津の変遷」を活用させていただいた。

旧制京大の史学科では1回生は史学・地理学の各概論をすべて履修することになっていた。日本史は西田直二郎、中村直勝、東洋史は那波利貞、宮崎市定、西洋史は原随園、時野谷常三郎、考古学は梅原末治、人文地理は小牧実繁、自然地理は地球物理学の野満隆治の諸先生であった。小牧先生の講義はヘットナーを底本とする地理学史、野満先生は学年の途中からの急遽応援という感じの御講義だったが、ジェオイドのことなど地球物理学の分野での新知見のご紹介だったようだ。地理学の専攻生は先生御執筆の抜刷も沢山いただいて恐縮したものであった。

1939年は日中戦争の戦局が軍部の思うように進展せず、膠着状態に陥っていた時期であった、いわば戦時下の小春日和の時期とでもいえたらうか。私も夏休みに台湾の友人の家を訪問し、澎湖諸島の馬公にも一泊することができたし、内地は尚更平穏で、統制経済もまださほど厳しいものではなかった。だが翌1940年は皇紀2600年に当たるといので政府はいろいろ祝賀行事を企画したが、そんなに盛り上がらなかった。むしろこの頃から食糧配給が厳しくなり、戦争の暗い影が一層濃くなって行くのである。

2 回生になると地理（小牧，室賀両先生）と西洋史（井上，前川両先生）の特講のほか小野三正さんによる地図学実習，野間先生の地理実習，非常勤講師の小野鉄二先生の西洋地理学史（ヘレフォード図の研究），米倉先生の歴史地理学の両特講が集中講義であり，それ以外に我々は理学部地質学教室に単位抜きの聴講に行っていた。楨山先生の地質学と松下先生の地質実習とである。中村新太郎先生の地形学は地理の連中は聴かせないということでアウトになった。だが松下先生の実習（毎週土曜）は大変めになった*1。

2 回生のとき今西錦司先生とその仲間たち*2 というべき集団の呼び掛けで「探検地理学会」が組織されたことも特記しておくべきだろう。その中心の働き手となったのが梅棹忠夫，吉良竜夫，中尾佐助の諸氏で，私たちも 1941 年の初夏までは研究会に顔を出していた。

三上正利先輩に引率されての夏休みの北海道巡検は楽しかったが，駅弁の御飯には既にかかなりの分量の豆が混入されていた。だが，夏休みが終わって京都に帰ってきた私たちを待ち構えていたのは「今年から卒業論文の対象地域としては日本以外の地域を取り上げること」という小牧先生の厳しいお達しであった。3 回生にとってはまさに青天の霹靂であった。テーマ変更のため，資料の収集に皆さん大変苦労されたようであった。しかし，一人だけではあったが，

*1 西洋史特講の受講は中等教員免許状（歴史・地理）取得のためである。

*2 ほとんどが三高探検部 OB，地理では川喜田君がそれにあたる。

入学当初からの研究テーマを論文化することを断固として貫き通した人のいられたことを付言して置きたい。下宿への帰り道がほぼ同じだった私は卒論演習の有った日の帰り道，その苦しい心情をよく聞かされたものであった。ところで私たちは卒論テーマの提出までにはまだ半年以上有った。私は以前から利根川を例として河川中流域の水害と治水の問題を纏めようと思っていたのだが，水害の激しい河川の中流域ならどこに事例を求めてもよかった。思い当たったのは中国，長江の中流部の湖広低地（両湖平原とも言う）で有った。幸い彝文堂で『揚子江水利考』が手に入り，『湖北通志』その他の資料を使えば長江中流部の治水・利水問題について纏める見通しはついたのであった。これが私を中国に結びつけるきっかけになった。

この夏休み明けに台湾の帰省先から帰ってきた戸川は意外な情報をもたらした。台湾総督府によって皇民化運動なるものが始まり，強制的に神棚を作らせて天照大神を拝ませ，創氏改名までさせているというのである。これは朝鮮総督府によっても強行されたことは今日ではよく知られていることである。私たちはこのような偏狭な国粋主義的風潮におもねった民族政策に激しい憤りを覚えたのだが，小牧先生からは期待したほどの反応が得られなかった。

そして秋の深まる頃，小牧先生は『日本地政学宣言』を刊行された。このいわば指導理念とも言うべきものの公表に続いて，『蘭領印度』，『印度支那』の 2 冊がそれぞれ地政学叢書の一冊として刊行されるに及んで，私たち学生にも小牧先生の特講で触れられていたことの大まかな全体像がほ

ぼつかめたように思われた。それはナチスの利用したハウスホーファー流のゲオポリティークの受け売り（戦時中東京の一部の人々がはやらせたような）とは全く性格の異なるものであった。教室で定期的に行なわれていた外国の地理学誌の紹介の際、ゲオポリティークについては、ほとんど毎号厳しい批評を諸先生から伺ったものであった。だが、それにしても『宣言』に盛られた理念の古めかしい復古調には正直言ってショックを覚えた。平生からリベラルな思想の持ち主として尊敬していた室賀先生、ややシニカルとはいえ厳しい批判精神の持ち主であったはずの野間先生にとって、これは苦渋に満ちた選択だったに違いなかったのだが、ついに私にはそれを問い質すだけの勇氣はなかった。先生と呼び掛けただけでは振り向いてもらえず、室賀さんと言ったらやっと顔を向けて下さったという話もある程の先生は講義の中でもチラリとお気持ちを覗かされたことが有ったように思う。とにかく、機関車小牧号に牽引された特急「日本地政学」号は様々な思いを載せて驀進を開始する。私の微かな記憶の中に地理実習室の前の廊下を歩む、苦渋に満ちた一人の先輩の暗い顔がある。その名は織田武雄。自らの意志で特急への乗車を断られた時ではなかったのだろうか。乗車拒否もまた身の危険を覚悟しなくてはならない時代であったから。

さて、2 回生も終わりに近づいた頃ではなかったろうか。当時「満州国」の建国大学教授になっていられた宮川善造先輩が地理学談話会の例会で地理学の理論的諸問題について報告されたが、その内容は西田哲学に依拠する地理学理論の建設を説かれた

ものであった。ちょうど高山岩男氏の『西田哲学』が岩波書店から刊行されて世の注目を集めていた頃であった。私には面白いお話であったのだが、小牧先生には御気に召さなかったようで、座が白けてしまったのを覚えている。後の噂では先生は西田哲学にはなぜか強い反感を持っていられたらしい。

1941 年、私たちが 3 回生になった時、2 回生には石田、今井の両君だけで、うるさい 3 回生どものために迷惑されたことも多かったことと申しわけなく思っている。ところが、次に入ってきた 1 回生の諸君は大島襄二、川喜田二郎、河合喜久男、小池洋一、斎藤晃吉、三田民夫、伴豊、船越謙策の 8 人で、我々より 2 人少ないものの、それぞれ一癖も二癖もある豪傑が揃っていたから、こちらが圧倒される思いであった。この頃、探検地理学会によるカロリン諸島のポナペ島の調査が計画され、浅井辰郎先輩（建国大学）のほか 3 回生の池田、戸川、河野、1 回生の川喜田、伴らが参加を希望した。3 回生どもは卒論は夏休みのポナペ調査の後留年覚悟でゆっくりやろう等と暢気なことを言っていたのであった。ところが 6 月になって予想もしなかった事態が生じたのであった。小牧先生が探検地理学会での講演の中で、探検は欧米列強の世界侵略のための手段であったが故に否定されるべきものだと決めつけてしまわれたのである。我々 3 回生は討議の結果、取敢えず今回は参加を諦めて卒論に力を注ぐことにした。このとき浅井さんと川喜田君とは調査に参加し、伴君は内モンゴルの日本軍の最前線まで行ってきたそうである。

1941 年 9 月中旬京大文学部事務室から 3

回生全員に宛てて速達の葉書が送られてきた。卒業期日の繰り上げのため卒論の提出は11月23日とすると言う内容であった。来るべきものが来たと覚悟せざるを得なかった。2ヵ月も提出が早まってはもう今までに集めた資料だけで書くしかないと思いついて執筆にかかった。11月初めに一応書き上げたが、これが遺作になるかも知れないと思うとつい欲が出て手直しを繰り返し、最後に製本に手間取ったため提出時間に15分遅れてしまった。例年なら受取拒否になるところをこの年だけは黙って受理してくれた。それから特講のレポートをいくつか書いて、半ば徹夜で書き上げた12月8日早朝ラジオは太平洋戦争の開戦を報じていた。卒論試問も那波先生に1つご注意を受けただけで無事終わり、ホッとする間もなく、12月18日には京大西部講堂での徴兵検査、そして12月28日3ヵ月繰り上げの卒業式となった。徴兵検査の際、検査官から「お前たちは今日どんな判定が出ても2月1日には皆兵役に服することになる」と言われた通り、翌年1月21日大学院に入学の許可された日の朝私の手元にはすでに「2月1日入隊すべし」との召集令状が届いていたのであった。

その2

1946—1949年の地理学教室

1946（昭和21）年4月21日私は佐世保市針尾の旧海兵団に上陸、復員第一歩を踏み出した。広島への原爆投下による同市の壊滅は既に中国で知っていたから、家屋も家族もこの地上にはないものと諦めていたので、取敢えず吹田市の叔母の家を訪ねた。

叔母一家は健在で暖かく私を迎えてくれた。さらに驚いたのは家は焼失したが両親は生きていて、しかも許婚者（今の妻）が京都から駆け付けて世話をしてくれていたのがあった。4月25日復員の挨拶に行った私に妻の父はこれまた驚くべきことを教えてくれた。戦争中の活動に対する責任をとって地理の教官全員が辞職されたこと、史学科の先生方の弁護のおかげで教室の消滅だけは免れたこと、主任教授は東洋史の宮崎市定先生が兼任され、地理からは織田武雄助教授、吉田敬市助手が選任されたこと、但し織田先生は立命館大学の専任教員になられたばかりであるため、しばらく兼任講師になっていただくこと等がその主な内容であった。そして余談だがと言って、織田さんは戦時中小牧さんの言うことに反対して破門されたという話も出たと付け加えた。

（後に織田先生は苦笑しながらこのうわさを否定された。）さらに今日は石橋五郎先生の告別式の日だと教えてくれた。石橋先生にはついに御拝眉の機会を得なかったのだが、後から思えば丁度この時刻に織田先生が弔辞を読んでいられたのではなかろうか。私は時代の大きな転換を感じつつも他方では帰るべき巣があり、御顔を存じ上げている先生方ばかりなのにホッとしたのであった。

一旦帰広の上、京都で結婚式を挙げた。前々からお願いしてあったので、仲人を小牧先生にお願いしたところ快くお引受けいただいた。丁度ご令息がご入院中というお取込みの最中だったのに、ご夫婦お揃いで大役をお勤め下さったご恩は忘れられない。

研究室に挨拶に伺ったところ、折よく織田、吉田両先生がいられて、私の大学院復

学の希望を快く受け入れていただき、有給副手として6月から勤務するよう取り計らって下さった。今も残る昭和21年6月30日付の辞令には「本学部副手を嘱託す月手当金貳拾圓給與」とある。最初の月給を手にして何か記念になるものをと大丸へ買い物に出かけた妻は果物鉢を手にと「20円ではこれ一つしか買えへんかった」とニコニコしながら帰ってきた。これでこっちも度胸ができたし、この鉢もその後長い間重宝したものだった。だが、戦後インフレの真ただ中、戦前の給与水準のまま据え置かれていた副手の月給にいたく同情して下さった織田先生は非常勤講師の口を次々と紹介して下さった。住まいも今津晃君（現京大名誉教授）の好意で3ヵ月余り同居させてもらった後、9月から洛北、岩倉の一角に住むこととなった。私の研究室勤務も6月から本格化することになるのだが年代を追って述べるのはいささか自信がない。むしろ事項別・トピック別に述べた方がわかって頂けるのではないかと思う。ご了承願いたい。

先ず教室のスタッフから始めよう。織田先生の教授昇格まで教室の主任は宮崎先生であった。対外的な面では先生は地理学教室を代表して実によく働いて下さった。しかし教室内部の運営については全て織田先生にその裁量を一任していられた。織田先生の御人柄を見込まれてのことであるが、織田先生も十二分にその負託に応えられた。おかげで地理学教室は敗戦直後のドラステイックな人事異動にもかかわらず、その後はたいした風波もなく戦後の激動期を乗り切ることができたのであった。宮崎先生は科挙や九品官人制の研究を始め幅広い中国

史、いやアジア史の研究業績で知られる偉大な東洋史学者であるが、パリ留学中にセーヌ川のほとりで古地図を買い集められたり、宋代江南の水学に関心を持たれるなど歴史地理学にも興味をお持ちであった。だから歴史地理の演習もお引き受けになったのであった。宮崎先生はまた地理の教授研究室の使用を吉田さんに許していられた。これは東洋史にご自分の研究室がおありだったし、織田先生がもと室賀先生の使われていられた助教授研究室でよいと言われたからであろう。事情を知らぬ人にはあるいは吉田さんが大教授然と威張っているように写ったかも知れないが、実は両先生の配慮で吉田さんは人文科学研究所以来のお仕事を落ち着いて続行できる場が確保されたし、副手の私も遠慮なく研究室の助手用の机に座ることができた。

だが何と言っても一番大変だったのは織田先生であった。まだ旧制時代だったから概説も特講も演習もと京大だけでもかなりの御負担だった上に立命館大学の1・2部と昼夜を分かつた大奮闘であった。それだけ御多忙なのに先生は必ず午後には研究室に顔を出され、一方では陽気に漫談をされたり、学部事務室で油を売ったりされながら、他方では的確な指示を与えられ、私は大変仕事がしやすかった。一見呑気でルーズなように見えるが、実は緻密な講義用のノートを事前に作られる方である。この点喜多村俊夫大先生の悪影響を受けた私など足元にも及ばない。そんな几帳面さをお持ちなのに先生の最大の弱点は朝にお弱いことで、午前中に講義のある日の私の大切な仕事はお宅に電話で催促することと教室の学生にもう少し待ってくれと言いに行くこ

とであった。

助手の吉田さんは長崎師範卒業後熱心な研究意欲を評価されて大正末年から昭和 3 (1928) 年頃まで地理学教室の助手を勤められ、その後も京都市内で教職につきつつ歴史地理学特に条里制の研究を続けられ、地理学談話会にもよく出席していられた。私も学生時代に何度かお見掛けした記憶がある。1939 年京大に人文科学研究所が設立されるとその助手として研究に専念された。その間右脚の疾患をステッキでカバーしながら、戦時中の悪条件を克服して広く西日本から朝鮮半島南部までの漁村の現地調査を進められた。その成果が後年学位論文『朝鮮水産開発史』として刊行されることになるのだが、戦後郷里の長崎県に引き籠もり、京都で住まいの見つからなかった吉田さんにお宅の二階を提供されたのも織田先生であった。食糧事情の困難な時代、同居はそう簡単にうまく行くものではなかったのだが、1949 年頃まで同居された様に思う。多少の雑音も聞こえないではなかったがよく冷静に処置されたものと感心している次第である。吉田さんはまた現在久世郡久御山町に属する旧巨椋池の干拓史編纂にも関係していられた。御講義の中で巨椋池の漁場を独占していた東一口（ヒガシイモアライ）のことを聞いた人もあったはずである。

非常勤講師として講義していただいた方々には先ず帷子（カタビラ）二郎、藤岡謙二郎両先生を挙げねばならない。帷子先生は東大地理出身の方で地形学を講義していただいたが、大変幅の広い方で、英、独、仏、露、スペイン等数か国語をマスターしてられ、ヴァイオリンにも堪能で、奈良女高師着任後教え子である奥様と大恋愛の

末結ばれたことでも知られた、その点で矢守君や藤森君の先駆的存在に当たる方であった。藤岡先生については余りにも有名だから今更くくだしい説明は不要であろう。先生は考古学出身ではあるけれども、先史地理学について早くから小牧先生の指導を受けられ、1940 年には既に地理学談話会の例会にも出席していられた。戦後間もなく『地理と古代文化』を刊行されたのを手始めにご自分の身長を超えるほどの地理学の研究書を出されたのに地理学ではアマチュアだという意識にこだわってられ、私などは先生が在来の地理学を越えて新しい先生独自の地理学の創造を目指してほしかったのだが、先生は寧ろオーソドックスな地理学方法論のマスターに熱中してられるようで、不満を感じて、先生はもうとくに立派な地理学者とみんなが思っているのと文句を言った記憶がある。先生もまた立命館の大学と専門部、それに京大と昼夜の別なく飛び回る多忙さだったが、学生の面倒見の良さも抜群で、謙ちゃんの愛称で親しまれ、京大教養部への転出の際は立命館大学の学生諸君を説得するのに随分苦労されたものであった。

兼担という形で自然地理学概論を担当されたのは理学部（地質）の松下進教授であった。令兄が地理の先輩（1929 年卒）であられた事もあって、私たちも懇切なご指導を受けたものだが、戦後も講義だけでなく、二上山の巡検等でも指導していただいた。またやや後には人文科学研究所の喜多村俊夫、大阪市大の村松繁樹の両先生にも特講の講義をしていただいた。特に喜多村さんは纏め上げられたばかりの学位論文「日本灌漑水利慣行の史的研究」（日本農学会賞

受賞)を講義されたので、近世史料を駆使した斬新な論述は学生さんたちに大変好評であった。また地図学実習は戦前からお願いしていた小野三正さんに指導していただいた。小野さんは地図工房主であるが、単なる地図書きの技術者ではなく、自分で考案された地図投影法を駆使して東アジア地図を作成するなど地図学理論をマスターした方であった。

さてそれでは副手はいったい何をしていたのか。教室の整理が主な仕事であった。戦時中研究室には体の弱い人しか残っていなかった事もあったであろうが図書の整理が不十分であった。カードと照合して見ると紛失も多かった。雑誌では未登録だったのか GEO POLITIK が完全に姿を消していたように思う。図書は史学科の書庫にもある。一冊一冊調べて見ると今までその存在も知らなかったような珍しい文献が続々見つかって書庫へ日参するようになった。研究室にはまた古地図や実習用機器もあるが、備品原簿と照合してみるとこれまた行方不明が多かった。無いものは原簿から抹消し、届け出ておかねばならぬ。整理の至って下手な男がするのだから、時間がかかった割に不十分なことしかできなかった。それでも私にとっては大変良い勉強になった。特に明治初年の水産調査予察報告の発見は後年大変役に立った。だがまだ予算が少ない上に、戦後インフレのため新刊書の購入もままならず、今までの蓄積の管理、保管で手一杯と言うのが実状であった。電力事情が悪くて、毎晩1時間置きに停電するという哀れな状態の中で薄暗いランプの光に頼りながら勉強していた時期もあった。

退職された先生方についてもちょっと触

れておこう。室賀先生は戦争中からご病気が再発して、ずっと闘病生活の連続であった。ご病状に起伏はあったものの、戦後地図学史や近世の漂流民についての著作を表され、1980年代まで病牀六尺の上での日々が多かったとはいえ生きられた陰には奥様の献身的なお世話があった。野間先生もお宅に閉じこもって読書と趣味に生きる毎を送っていられたようだが、その蓄積が後年『生態地理学』等の連作となって現われてきたのであろう。一方小牧先生は決心をすぐ実行に移す方であった。一時大学の近くで古本屋を始められたことがあった。士族の商法で長続きしなかったが、開店直後ご自分の蔵書の一部を商品にしてくださいと寄贈されたのが織田先生であった。

敗戦後の数年間は復員・引揚げラッシュの時代だった。満鉄調査部等の調査機関や外地の学校、南方占領地域の司政官等様々な任務でアジア各地に出向していた先輩たちがあるいは単身、あるいは家族とともに様々な苦難の末に帰国されたのであった。ある秋の日の午後一人の方が研究室に見えた。すぐ引揚者とお察ししたその方は「私は昭和9年に卒業しました山口と申しますが」と名乗られた。アッ、北鮮3港や。とっさにわかった。満鉄調査部で港湾問題を研究され、地理論叢に北鮮3港のことを書かれた山口平四郎さんである。やがて見えた織田先生の暖かい笑顔にホッとされた山口さんのお顔が今も目に浮かぶ。神尾明正さん、川崎健史さん、須藤賢さん、いずれも昭和11年卒業のサムライの方々だが、心の故郷へ帰ったような楽しい顔をしていられた。だが、反対に戦時中の職務責任などを問われて、思いがけない公職追放の処分

を受けて一時でも教壇を去らねばならなかった方も他にいられた。立命館大学教授の岩根保重先輩のケースなど私には未だに理由が良くわからない。

戦時中一時は1年に20人を越す専攻生の入学した地理学教室だったが、病人以外は学徒出陣で軍隊に狩出された。しかも復員はてんでばらばらであった。それだけに卒業もばらばらになった。しかも戦後間もない数年間は3月と9月と1年に2回卒業している。年1回になったのは1950年からである。復員が遅れたり、また家庭の事情もあって損をした人も多い。1946年9月卒業の岩田慶治、水津一郎両氏も1945年9月卒業の春日茂男氏と同期の入学だった。私が副手になって最初の卒業生がこの岩田氏、水津氏たち8人であったが、岩田氏も水津氏も卒論のテーマがオーストラリアのアルンタ族を対象にしていた。水津氏は大学院の特別研究生になり、岩田氏は禅寺で黙々と読書と座禅の日々を送っていた。だが、学生生活は苦しく、アルバイトの口も多くない中でズルチン、サッカリンなど人工甘味料の製造で学資を稼いでいた人もあった。そんな中で自らのアルバイトで6人の弟妹を育て上げ、自分も立派に卒業していった木地節朗氏のような例もあった事は誇ってよいだろう。また駒沢大学から多田文男教授の指示で京大に再入学してきた井関弘太郎氏は登呂遺跡や豊橋瓜郷遺跡などの発掘に参加し、先史自然地理とも言うべき分野の研究を始め自然地理の分野での蓄積を歴史地理に活かす事に努めた。その他にも宮畑巳年生氏、中山修一氏等地味な中にも個性的な研究者が卒業している。1946年には5人の学生が入学したがそのうち3

人までが神戸一中の近藤忠先輩の教え子であった。浮田典良、末尾至行、由比浜省吾の3氏であるが、新中国誕生のこの年あたりから京大地理も新しい戦後世代へ移行した様に思う。

最後に地理学教室の学会活動について触れておきたい。これには二つの側面がある。一つは既成の学会への参加であり、もう一つは自主的な全国学会の創設である。先ず前者から見てみよう。日本地理学会への参加である。我々の学生時代にはせいぜい地理学談話会大会に出る程度、日本地理学会には出なさいとも言われなかった。織田先生は積極的に参加して他大学と交流することを勧められた。1948年ごろまでは日本地理学会の大会は専ら東大理学部2号館で開いていた。我々は満員の夜行列車に立ったままで春秋2回東京へ行ったものである。おかげで木内信蔵先生以下東大の若手との交流ができ、敗戦当時参謀本部から持ち帰った中国関係の地図を分けてもらったりした。そんな日本地理学会が初めて東京以外で開いたのが1949年の春の大会であったと思う。長岡天神付近の巡検で掘りたての筈を買い込んで土産にされたのを覚えている。当時は経済地理学会も、歴史地理学会も、国際地図学会もまだ生まれていなかった。東京地学協会への入会も戦後はじまった。

自前の全国学会の創設とは言うまでもなく人文地理学会のことである。ただしこれには短いながらも前史がある。西日本地理学会である。織田、帷子両先生が中心になって作られたが、数回の会合を開いただけで人文地理学会に組織替えされた。推進役は織田、帷子、藤岡、辻田右左男、西村睦

男と言った方々であった。ちょうど学制改革で新制高校の社会科に人文地理が置かれることになり、先生たちが授業のための指針を求めている時代だったから会の名称としてはタイムリーなものであった。しかし機関誌「人文地理」の刊行には苦労が多かった。最初の出版社の日本科学社は3号を印刷したところで潰れ、学会役員が総出で印刷所から雑誌を肩にかついで持って帰った。やっと柳原書店が続行を引き受けてくれたものの、その見返りとして人文地理新書全8巻を刊行することになった。そこで多数の人文地理学会員（その大部分は京大と立命館大の地理の卒業生）に執筆してもらったのであった。発足当時は地理学研究室で学会事務もやり、役員会も開いていた。まだまだ規模が小さい時代の話である。まことに牧歌的な時代ではあった。

翌1950年春私は岡山へ移った。だが京都以来の御縁で九学会連合の対馬調査の地理班員として参加した。1950年の調査は木内先生が班長だったが、1951年には織田先生が班長になられた。地理学会の交流は共同調査の分野にまで拡大したと言える。

陳列間の一階には地理学陳列室があり、東南アジアやオセアニアの工芸その他が収蔵されていた。特にオセアニア関係の大部分は第一次世界大戦当時旧ドイツ帝国の統治していた南洋諸島で内田寛一先輩（当時助手）が収集されたものである。これらは戦時中もほぼ完全に保存され、今も博物館に収められているので詳述はしないことにする。

また、敗戦直後、日本地理学会出席のため上京すると、在京の地理学談話会の諸先輩、ことに浅井辰郎、浅井得一の両先輩が

中心になって懇親会を開いて下さった。あの苦しい時代に受けた御配慮は今も忘れられない思い出である。

助手時代の思い出

末尾至行（昭和27年卒）

筆者が地理学教室の助手をしていた期間（昭和29年10月～35年12月）は、物の不自由な時代は過ぎていたが、しかしいまだ高度成長期には入っていない一時期である。研究室がまだ陳列館2階の北西隅にあった時代で、夏の午後など西日の暑さがたまらなかった。冬は冬でひよわな窓枠を通しての寒風が身にしみた。夕方ともなると百万遍の辻の新聞売りの少年の、「夕刊どおですかー、ゆうかーん」という寂しげなかん高い声が、部屋までよくしみ通ってきたものである。

陳列館の大半の部屋は暖房が火鉢であったが、北側の一角は床がコンクリートのために石炭ストーヴが許されていた。だから冬ともなると他の教室からの来客も多くなる。元旦も、本文での先生方の年始会のあと、戻ってこられる織田先生を矢守君や佐々木君ら院生諸君とお待ちして、ストーヴを囲み酒盛りするのが年中行事となっていたが、主役はむしろお客さんの藤岡先生、森鹿三先生、日比野丈先生、門脇禎二さんらの酒豪である。酒が尽きたのでヤカンの湯を一升瓶に注ぎ込み、それを日比野先生に勧めて「わしに水を飲ます気かー」と一喝をくらったのも、他教室からの若い客人であった。

進々堂のコーヒーを初めて口にしたのは忘れもしない、学生時代の末期、帰路で織田先生に誘っていただいた時である。お偉い先生方の溜まり場のような雰囲気ですう易々と入れる店ではなかっただけに、緊張しながらも感激したものである。その頃は予餞会も進々堂でのケーキとコーヒーが決まりであった。1年後輩の矢守君の卒業時には、彼が挨拶の冒頭で、「スターリンが死んだというに…」と叫んだのが今だに印象に残っている。昭和28年のことである。

助手時代にはコントロールも出来て皆でしばしば通うこととなる。夕方、大相撲のテレビが見られるのも楽しみであった。しかしそのうち、不経済だと、研究室でコーヒーブレイク（という言葉はまだなかったが）するようになった。事情をコントロールの親父さんに話すと「困りましたなあ」と嘆かれた。3時になると、当時研究室にいた人文地理学会の事務の女性がパーコレーターでコーヒーを用意してくれ、教養部からもコーヒーブレイク提案者の藤岡先生、西村先生、浮田君もわざわざやって来られる。総勢十数名ともなるから女性たちも大変だった。

教養部との行き来はしょっちゅうで、先生方とは示し合わせて本部地下の生協食堂で昼食を共にすることもあった。そそっかしい藤岡先生は時々刺身にソースをぶっかけて居られた。

織田先生は、国際法の大御所の御尊父の関係から、法学部の田畑茂二郎先生と御親交があった。筆者もお供して偶然お会いした飲み屋での雑談からか、教室対抗の野球試合の話が持ち上がり、今、吉田電報電話局の建物のあるその元の空き地で一戦を交

えた。両先生にも必ずピンチヒッター一位には出て頂くというルールである。成田君や筆者の活躍にもかかわらず相手ピッチャーの川又良也氏（現大阪国際大学長）に押さえられて惜敗したが、試合後の楽友会館での飲み会では雪辱したと記憶している。そういえば楽しみも少ない時代、農学部や教養部のグラウンドではよく野球の試合をしたが、人数の少ない考古学と地理学の混成チーム対国史学チームの試合もあった。そういう時は名門（旧制）小倉中学のサウスポーエースだった樋口隆康さんがもちろんピッチャーである。筆者は大抵ショートを守っていたが、この時は相手のショートの原田伴彦先生も上手だった。試合後はショート同志で誉めあったりした。

昔、京都では少年非行を予防する目的でか、夜の10時になるとサイレンが鳴ったものである。御近所の織田先生や矢守君とは、それを合図に銭湯へ出掛けるのが日課であった。時には遠方から船越君や佐々木君（？遠すぎるので不確か）までが、風呂桶を手に加わった。織田先生は湯船の中や洗い場でも例のおしゃべりで、お付き合いをしているとつい長湯になる。冬の星空の下、帰路の別れ際にも長々と話されるので湯冷めをすることも間々あった。今もおぼえているのは「ストラボの翻訳をしないか」とのお話である。残念ながら当時としては荷が重すぎてお受けできなかった。

この銭湯では考古学教室助手の横山浩一さんにも時々出会っていた。野沢秀樹君に呼ばれて九州大学文学部の集中講義に向向いたのは昭和61年のことであるから、以下の話は30年もたったの後日談ということになる。野沢君が文学部長の横山さんも交

講演会の報告

じえて設けてくれた席での意外な一言、「あの頃は地理学教室の重要事項は銭湯の中で決められていると評判だった」には驚いた。水津先生が助教授で着任される以前の時期であるから状況としては符合するが、横山さんのもきつい冗談の一言だったでしょう。

振り返れば、助手時代はお蔭様で色々な仕事に携われて幸せであった。今も細々と続けている中近東の実地調査も、昭和 34 年に織田先生にイラン・アフガニスタンへ連れて行って貰えたればこそである。フィールドワークの経験も、国史学教室の小葉田淳先生と織田先生による若狭漁村の調査や、藤岡先生の紀川・櫛田川流域調査などで培われたところが大きい。人文地理学会編『地域調査』刊行の際は山澄元君と出張校正をして最後の詰めをしたし、『河谷の歴史地理』の装丁は外遊中の藤岡先生に変わって筆者の独断で決めた。助手時代の最大の心残りといえば、折角、織田先生に授業を担当させて貰っていながら荷が重く、当時の学生諸君には迷惑のかげどおしだったことである。誠にすみませんでした。



map of the discoveries of Columbus
Basel (Switzerland). 1493

1996年11月15日、文学部博物館において、談話会秋期講演会として大阪大学名誉教授・海野一隆先生と博士後期課程2回生・佐藤廉也氏（現京都大学総合博物館助手）に講演していただきました。

剣阿と「地理図」

海野 一隆（昭和 20 年卒）

『金沢文庫古文書』武将書状編には、鎌倉幕府の兵庫頭という役職にあった長井貞秀（? - 1310）が、現在の横浜市金沢区にある称名寺の第2代長老剣阿（1261 - 1338）に宛てた「638 貞秀書状」という書翰が収められています。この書状には9月1日とあるだけで、年次は書かれていませんが、それには、嘉元3年（1305）5月17日に、一門内の抗争によって殺された左京権大夫北条時村の相続人に関する記述がみえます。また、書状の内容から、剣阿が善光寺に行く予定であったことが知られますが、剣阿49才（1309年）の時の写本の識語に、嘉元3年に上洛したことが記されており、善光寺へは上洛の途次に立ち寄ったのではないかと推測できます。以上のことから、この書状の書かれた年代は、嘉元3年と推定されます。

この書状を読みますと、剣阿が貞秀から「地理図（ぢりず）」と「日本記（やまとふみ）」を借り受けていたことが知られます。ここにいる「日本記」とは、すなわち『日本書紀』のことではありますが、剣阿が嘉元4年（1306）に筆写した『日本書紀』は、『丹鶴叢書』に収められて伝わっ

ています。『丹鶴叢書』は江戸時代に新宮藩主水野忠央が編集出版したのですが、原本の筆跡をそのまま木版にしています。その巻1の奥書には、長井貞秀の家に代々伝えられていた『日本書紀』を写しとったと書かれています。

こうしたことからしまして、「地理図」もまた、『日本書紀』と同様に剣阿によって筆写されていたのではないかと思います。

ところで当時、普通の地図は絵図と呼ばれており、わざわざ「地理図」という以上は、ちょっと違うものなのではないかと思えます。例えば、当時の『沙石集』という書物には、「天文地理内典外典」とあり、天文といえは地理という認識があったといえます。そうすると「地理図」とは、天文に対応するのだから、お寺とか村の地図ではなく、もっと広い天下全体の地図をいうのではないかと思います。そう考えるとき、現在、金沢文庫に保管されている、称名寺所蔵の半分だけの日本図が剣阿の筆写した「地理図」の候補としてあがってきます。

そこで、この地図に書かれた文字の筆跡と、剣阿が筆写した『日本書紀』や、剣阿の弟子曇春の写本『日本書紀』に剣阿が寄せた識語の筆跡などを比較してみますと、剣阿の筆跡の特徴を、地図の中の文字にも見出すことができます。

次に、この地図の図柄や構成から、剣阿が描いた可能性について考えてみましょう。

まず、この地図には「蒙古国」の名が見えますが、日本人が「蒙古国」の存在を知ったのは蒙古襲来以後のことなので、この地図が蒙古襲来以後に成立したものである

ことは明らかです。

ところで、この地図には、日本列島を取り巻くようにして、蛇のような動物が描かれています。この動物はどうも蛇ではなく、龍だったのではないかと思います。鎌倉時代に龍がどのように描かれていたのかということは、高山寺に伝わる鎌倉時代初期に描かれた「華嚴縁起」という絵巻から知ることができますが、それを見ますと、龍の前足・後足はだいぶ離れていることがわかります。従いまして、地図の中で日本列島を取り巻かせるとすれば、失われた地図の半分に前足・後足と頭があってもおかしくはないと思われます。また、うろこの描き方を見ても、龍ではないかという気がします。

以上のような推定を裏づけるものとして、江戸時代、寛永の頃に京都の「さうしや(草紙屋) 九兵衛」という出版元から刊行された日本図があります。この図にも、やはり日本列島をとり巻く形で、龍のような動物の姿が描かれています。ただし、この動物の名前については、「大とうれん(大唐鍊：有名な刀の名前)」「七はうとうぎよ(七宝塔魚)」「まかさつぎよ(まかつぎよ：シャチ)」と、一種類の動物に対して三通りも名前があげられています。しかもそれはどうみても、この動物の名前としては不適當なものばかりであります。これは、この図柄が既に出て来ていて、意味が分からなくなっていたということです。つまり、称名寺の日本図の半分に残っている、蛇やら龍やらわからない動物が、日本列島を取り巻いている図は、連綿として写され写され寛永の頃まで伝えられてきた。ところが、もうその動物の名前はさっぱりわか

らないということで、誰かが適当にこんな魚の名前をつけたのではないかと思うのです。

さて、称名寺所蔵の日本図は、「蒙古国」の他にも、「羅刹国」「新羅国」「雁道」「龍及国」「雨見島」「唐土」「高麗」など、日本図としては国外の地域が多く描かれているところに特色があります。ということは、この地図の作者が国外に対して関心を抱いていたことの現れといえます。

そして、剣阿もまた、国外について関心を抱いていた人物と考えられます。なぜならば、前述の弟子曇春の写本『日本書紀』に寄せた識語に、「東平肅慎。北降高麗。西虜新羅。南臣吳會。三韓入朝。百濟内属。范史謂之君子之國。唐帝推其和皇之尊。」という一節が見えるからです。もっとも、これは剣阿自身が考え出した文ではなく、歴史的な事実でもありません。平安時代に三善清行が書いた「意見十二箇条」（914年）という文章から引用したものであります。「意見十二箇条」は、文章の手本になるような詩文を集めた『本朝文粹』（平安後期）という本に収められておりまして、その写本は当時称名寺にもありました。

剣阿はまた「意見十二箇条」の文を引用するすぐ前のところで、日本は神と仏が国を守ってくれており、だから敵国は犯すことができないんだという内容の文を書いています。したがって、剣阿は愛国心を持ちながら、国外に目を向けていた人物と思われるのです。

以上のことから、剣阿が貞秀の持っていた「地理図」を写した可能性は大きく、そしてその「地理図」とは、現在半分が残っている称名寺所蔵の日本図にほかならない

と考えられます。

辺境の民族政治学：エチオピア国家と 焼畑農耕民マジヤンギルの30年 佐藤 廉也（平成3年卒）

今回は、エチオピアの焼畑農耕民マジヤンギルの現代的な状況についてお話ししたい。アフリカに限らず、焼畑社会はこの数十年に急激な変化を体験してきており、それらの変化と持続の局面を理解するための新たな枠組みが求められている。

最近の歴史研究では、アフリカの「部族（tribe）」という概念は、むしろヨーロッパの植民統治の産物であるということが明らかになってきている。つまり、アフリカのエスニック・グループというのが固定したものではなく、もっと小規模で可塑的な流動性のある集団だったのが、ヨーロッパの植民地化の過程の中で統治しやすいように、ある程度まとまりのある部族間に明確な境界線を引くことで、互いに競合関係においた。国境線も含め、そうした競合関係が現在の民族間の争いの種になっている。

エチオピアは、イタリアの短期間の占領期を除いて、アフリカの中でほぼ例外的に独立を守ってきた王国であったが、その国境線は19世紀に周囲の植民地獲得競争にエチオピア帝国側が反応することで確定されたという経緯があり、やはり植民統治のバランスの上に作られた国家であった。こうした植民統治に起源を持つ多民族国家というものが現在のアフリカ・エチオピアの困難な状況作り出しているということを、ひとつの前提として最初に示しておきたい。

調査対象としたマジヤンギルはエチオピア西南部のスーダン国境の辺りに住む焼畑農耕民である。東はセム語系、クシ系民族などの住む高地で、西側の低地のサバンナはアニューワ人やヌエル人などナイロート系の諸民族の世界になる。この高地と低地の間の、標高 500~1600 メートルくらいの範囲に立派な森が広がっており、マジヤンギルはそこで焼畑農耕や狩猟採集などを営んでいる。人口は約 5 万人で、単純に計算すると 5 人/ha 程度と、焼畑農耕を営むのにまだ比較的余裕のある状態である。

彼らは伝統的に、親子を核とする小さな世帯構成によって居住し、2~10 世帯までの小集団で森を切り開いて分散居住していたが、エチオピア政府による集住化政策により、現在では数百人を単位とするいくつかの行政村を形成して住んでいる。主食はタロイモ・ヤムイモ・サツマイモ・キャッサバといった芋類のほか、モロコシ・トウモロコシの 2 種類の穀類である。

マジヤンギルは年中何らかの作物が収穫できるような農耕サイクルを持っており、危険分散・労働配分の面で、非常に優れた農耕システムである。その例として、乾季に伐る畑と雨季に伐る畑がある。乾季に焼畑を伐採することは世界の焼畑地において一般に見られるが、マジヤンギルの人々は雨季に森を伐採して畑をつくるというユニークな農耕をおこなっている。これは一種のマルチング農法で、伐採した植物遺体を焼却せず播種後の耕圃にかぶせる。これを私は「焼かない焼畑」と呼んでいる。

その他、補助的な現金収入の手段として、蜂蜜採集を行なっている。蜂蜜採集活動は、マジヤンギルが森の生活を指向すること、

自らの生活に森林環境を必要とするという意識のあり方に深く関わっている。

このようなマジヤンギルの歴史を、キリスト教受容という点を中心に概観してみよう。1965 年にマジヤンギル居住区の中にプロテスタント系の教会と学校、および診療所が建設され、アメリカ人夫妻が布教を開始した。この宣教師は特に若い人によって受け入れられるが、12 年の布教活動の後、1974 年のエチオピア社会主義革命の際に国外退去となった。それ以後、1991 年に社会主義政権が崩壊するまで、政府によるマジヤンギルの集住村落化、公立小学校の建設などが進行する。このミッションのいない布教の空白期に、宣教師の教えを受けていた若いマジヤンギルたち自身によって、キリスト教の普及運動が進行し、キリスト教がマジヤンギル社会のマジョリティになっていった。

その後、1991 年に社会主義政権は打倒されるが、新政権の基本政策として民族を基本単位とする地方自治が標榜されたことから、マジヤンギル自身も政治的代表的権を獲得する機会を得ることになり、こうしたことが逆に民族間の権力闘争を激化するという皮肉な事態もみられるようになった。例えば、かつてマジヤンギルの居住地だったテピという町が隣の州に組み込まれ、同時に、古くからマジヤンギルに差別感情を持っていたシャカチョー人によって、その町周辺が圧迫されつつあるということから、マジヤンギルが武装蜂起して対抗するという事件も起きている。

さて、こうした歴史的背景の中で、マジヤンギルにとってのキリスト教受容はどのような側面を持つのか。キリスト教が入る

前、マジヤンギルにはある種の至高神的な神の概念が存在していた。そして、その神の力を背景に、儀礼や霊気治療を行っていたタパットという儀礼のエキスパートたちがいた。これは外来のエスニック・グループからやって来た氏族だと伝えられている。注意すべき点は、マジヤンギル内部のキリスト教普及運動の中心的存在となっていた若者というのが、実はこのタパットの息子たちだったということである。つまり、社会関係の面からみると、キリスト教受容はメジャークランに属する若者たちの、リーダーシップの維持を含意する文化革新運動だったということもできる。

こうして受容されたキリスト教だが、現在行なわれている週4回の礼拝活動においては、マジヤンギルを取り巻く民族間関係や、政府の政策の問題といった、非常に政治的なメッセージを込めた説教がしばしば行われる。その言説の代表的なものとしては、①キリスト教が広く普及していることを指摘し、同じキリスト教を信じるものとして、他の民族との対等性を強調するような言説。②酒やたばこをやる古い世代と、神の教えを守る若い世代との違いを強調し、過去の世代との決別と進歩、あるいは変化を肯定するような言説。③社会変化を促す外的要因(ex.政府プロジェクトなど)を、神の啓示として積極的に受け入れようとする言説、などが挙げられる。このように、マジヤンギルの礼拝時の説教には、国家や民族間関係の中で自らの自律的な立場を確立しいこうとする際に、事態を有利な方向へと洗練するような言説としての側面があると指摘できる。

こうしたキリスト教受容の過程を見ると、

キリスト教というものをマジヤンギルの歴史を背負ったものとして説明できるのではないかと考えられる。つまり、マジヤンギルにとっては、エチオピア政府の政策であるとか侵略であるとか、あるいは政治参加への要求であるとか、そうした彼らにとって必然性のない歴史的出来事にさらされる中で、それらに対して確信を持って対処する道筋を示し、社会の再編成を正当化し推進させていくような共同の物語が、マジヤンギルのキリスト教受容であったといえるのではないと思われる。

以上、北東アフリカの地域の現状を考えるためにエチオピア国家と民族社会との関係を、政治や宗教を材料として述べた。最後にまとめとして、最初に触れた民族の対立という問題に戻ると、部族というものが植民統治という出来事によって括りかえられてしまったように、現在でも民族集団の帰属意識、行動様式はその集団にとっては「外部」といえる出来事によって変わり続けている。特に、民族意識が先鋭化するのには、ネガティブな状況に対する防衛反応であるという側面が強いといえる。アフリカの地域問題、民族問題というのは、現実の政治的・経済的不平等の反映として理解すべきことと思われる。今求められることは、紛争や貧困の原因を「民族の違い」に還元してしまうような転倒した議論を避けつつ、できるだけ民族という帰属意識を思い出す必要を感じないような社会を目指して、問題を解決していくことが、困難ではあるが必要だと思われる。

研究室便り

<京都大学総合博物館と地理学教室>

金田章裕

本年度もまた地理学教室をめぐる大きな変化を御知らせしなければなりません。昨年度会報(7号)で御知らせ致しましたように、文学部の改組による文学研究科の部局化に伴って大学院地理学大講座が教室の本体となりましたが、それに続き本年(平成9年度)4月から京都大学総合博物館が、学内共同研究教育施設として発足しました。それに伴って、文学部博物館が総合博物館へと移管され、新たに自然史・技術史を軸とする理・農・工学部系の部分を増設し、教授3, 助教授3, 助手3の教官組織でスタートしました。地理学教室の一部でありました地理作業室・民族資料収集展示室・古地図収蔵室なども、日本史・考古学の部分とともに新しい総合博物館の管理下に移り、明治時代以来の多数の地図・民族資料コレクションも供用替の準備を進めています。

総合博物館の9人の教官のうち、文学研究科からは3人が移籍ないし採用され、地理学では大学院生であった佐藤廉也君が助手として採用されました。今後佐藤助手を中心に地図・民族資料コレクションの管理と研究・教育への利用の充実をはかることとなります。地理学教室もこれまで通り、全面的にその利用をはかり、充実への協力を続けて参ります。同窓生諸兄弟におかれましては、今まで担当者不在のために御不便をお掛け致しましたが、今後は教室(753-2793)ないし同助手(753-3286)あて

に御連絡をお願い致します。

なお、教室の事務は昨年7月から真木智子さんに御願い致しております。

本年度は、大学院博士後期課程9名、修士課程8名、学部4回生19名、3回生6名、大学院研修員1名、科目履修生2名という大所帯になっております。

<研究室の動静>

本年度は6名の3回生、そして昨年7月より教室事務に真木智子さんを迎えました。簡単に自己紹介してもらいます。

【3回生】

岩崎しのぶ

小学校は大阪、中学・高校は神戸で学び、そして憧れの京都にやって来ました。京大書道部に所属しています。線の一本一本にかける集中力と、作品を一步離れたところから眺める心の余裕を、今後の勉強に対しても持つことができればと考えています。ご指導の程よろしくお願い致します。

上杉和央

香川県から来ました。京大の地理学教室に入りたい、と思った時からはや4年。今、その念願が叶ってとても喜んでます。部活の方ではジャズをしており、サクソやクラリネットをふいています。ジャズに興味のある方はもちろん、興味のない方も是非一度聴きにいらして下さい。

小野雄彦

はじめまして。奈良の東大寺学園出身の「オノタケヒコ」と申します。中学・高校と陸上競技をしていましたが、今は辞めて、

腹筋がやわらかくなっていくのを少しさみしく見つめながら、ギターを弾いたりバイトをしたりとのんびり暮らしています。地理学についてはまだ何もわからない未熟者ですが、どうぞよろしくお願いします。

北野剛寛

はじめまして。出身は岡山，中学・高校は鳥取，そして今は実家が広島なので，中国地方はおまかせ下さい。趣味は野球，ラグビーなど，体を動かすこと。ちなみにスキーは2級を持ってます。2回生までもノンビリ生活を送っていたので，超多忙と噂の地理学専攻で生き残れるか，不安で一杯ですが，可愛がってやって下さい。よろしくお願いします。

谷 明人

出身地は，東京の新宿です。都市が好きなので，都市地理学を希望しています。最初は素粒子物理学を勉強したかったのですが断念し大学を3回転々として現在に至りました。趣味は，将棋，天文，クラシック音楽，美術品鑑賞（西洋絵画・水墨画・中国やエジプトの彫刻など）。尊敬する人は，菅原道真，芭蕉，雪舟，ポーア。天気図も描きます。

前田奈実

3回生になって突然忙しくなった大学生生活に“あたふた”しながらもうれしい今日このごろです。目下第一の目標とすべきことは，遅刻をしないこと。うーん，しんどい…。始めたばかりだけど地理のことをもっと勉強したいです。バスケ部に入っていて，そっちのほうも今年は特に頑張るぞ。

皆さん，よろしくお願いします。

【事務】

真木智子

自宅は長岡京市の郊外で，遠く京都市内が一望できます。かつてはのどかな片田舎でしたが，最近は無計画な土地開発によってすっかり様変わりしてしまいました。趣味は gardening と料理。海外の食生活に興味があります。音楽はヘビーメタル以外なら何でも聴きますが，特に好きなのはクラシックギターです。どうぞよろしくお願いします。

<学部卒業生・院生の進路>

*学部卒業生

浅井俊昭	科目履修生
安福伸光	(株)セコム
嶋野公一朗	大和銀行
山田潤哉	大和ハウス工業(株)
角田(江下)以知子	科目履修生
太田隆文	未定
金崎享子	(株)クボタ
野村創	西日本新聞社
石原大嗣	NTT
原潤	読売新聞社
禾佳典	大学院文学研究科
中鉢奈津子	大学院文学研究科
中川訓範	経済学部学生
山口秀樹	(株)東芝
松枝法道	イリノイ大学博士課程

*博士後期課程

佐藤廉也	京都大学総合博物館助手
------	-------------

<院生の研究状況の報告>

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。

PD. 滝波章弘

○現代南仏丘上集落のルネッサンス——バスプロバンスのセヨンの例——, 史林 76-5, 751-775 (1993)

○ツーリズム空間の同心円性と関係距離の抽出——横浜市立小学校家庭の家族旅行のデータから——, 人文地理 46-2, 121-143 (1994)

○ギド・ブルーにみるパリのツーリズム空間記述——雰囲気とモミュメントの対比——, 地理学評論 68-3, 145-167 (1995)

○プレッドの行動行列によるツーリスト行動の分析, 地理学評論 69-9, 757-769 (1996)

○作文に表現される子どもの世界——旅行世界と日常世界の違い——, 人文地理 48-5, 60-76 (1996)

D4. ロサリア・アビラ・タピエス

○“Nueva perspectiva de las migraciones españolas”, *Anales de Geografía de la Univ. Complutense* (Madrid)13, 111-126 (1993)

○在日外国人と日本人の人口移動パターンの比較研究——大阪市生野区を事例として——, 人文地理 47-2, 62-76 (1995)

○“Migraciones interiores en Japon”, *Estudios Geograficos* (Madrid), 頁未定 (1997)

D3. 米家泰作

○吉野山村における近世前期の耕地経営——川上郷井戸村を事例として——, 史林 77-1, 116-134 (1994)

○中世山村の境界と山地地形——土佐国大忍荘槇山の名領域——, 人文地理 48-1, 48-68 (1996)

○『熊谷家伝記』にみる開発定住と空間占有——落人開村伝説の読み解き——. 史林 80-1, 38-74 (1997)

D2. 李 禧淑

○韓国における氏族マウル住民の移住と適応——ダム建設にともなう移住民・全州柳氏を事例として——. 人文地理 49-3, 1-21 (1997)

D2. 堀 健彦

○八・九世紀伊勢神郡の再編成過程と領域性——その歴史地理学的試論——, 史林 78-1, 97-137 (1995)

○証書類にみる空間表現の基礎的研究——平安・鎌倉期大和国を事例として——. 人文地理 49-2, 1-24 (1997)

D2. 水野真彦

○自動車産業の事例から見た企業間連関と近接. 地理学評論 70-6, 352-369 (1997)

D1. 門井直哉

○長門国府周辺施設の歴史地理学的考察, 史林 79-2, 135-150 (1996)

D1. 祖田亮次

○輪島市海士町の漁民集団——その特質と持続性の背景——, 人文地理 48-2, 62-75 (1996)

M2. 足立 理

○枚方市における公共図書館の最適立地問題 ——立地-配分モデルによる分析——
一. 人文地理 49-4, 頁未定 (1997)

M2. 有留順子

○性差からみた大都市圏における通勤パターン ——大阪大都市圏を事例として——
一. 人文地理 49-1, 47-63 (1997) [共著]

M2. 山村亜希

○中世鎌倉の都市構造. 史林 80-2, 42-82 (1997)

<1997 年度講義題目>

講義

教授 成田孝三 地理学講義 I
" 石原 潤 " II

特殊講義

教授 成田孝三 インナーシティと都市政策

" 金田章裕 景観史方法論

助教授 石川義孝 人口移動の計量分析

人環研 足利健亮 歴史地理学の諸問題
教授

" 金坂清則 地理学における「地域」続

総人 山田 誠 比較地域形成論
教授

理学部 岡田篤正 自然地理学
教授

経済研 藤田昌久 都市経済学
教授

講師 藤井 正 大都市圏の多核化

" 水内俊雄 国土開発の政治社会

" 関 満博 アジア・中国発展と
日本企業

*演習 I *

教授 成田孝三 地理学研究法 I

" 石原 潤 " II

" 金田章裕 " III

助教授 石川義孝 " IV

*演習 II * 人文地理学の諸問題

教授 石原 潤

" 成田孝三

" 金田章裕

助教授 石川義孝

講読

教授 石原 潤 英語地理書講読

" 金田章裕 独語 "

講師 橋本征治 仏語 "

人文研 濱田麻矢 中国語講読
助手

実習

助教授 石川義孝

講師 森 三紀

博物館 佐藤廉也

助手

大学院演習 地域の諸問題

教授 石原 潤

" 成田孝三

" 金田章裕

助教授 石川義孝

事務局から

<地理学談話会 1996 年度会計報告>

(1996 年 4 月～1997 年 3 月)

【資金会計】

収入

年会費	252,600
繰越金	292,162
計	¥ 544,762

支出

運営費への振替	140,010
次年度への繰越	404,752
計	¥ 544,762

【運営費会計】

収入

資金会計からの振替	140,010
秋期懇親会会費	162,000
春期 〃	179,000
計	¥ 481,010

支出

秋期懇親会経費	189,777
論文発表会経費	200,638
会報等印刷費	12,600
通信・文具費等	73,567
弔電	4,428
計	¥ 481,010

<計報>

前回の会報発行以降、次の方々が亡くなられました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(確認分、括弧内の数字は卒業年、敬称略)

別枝 篤彦 (S7)
辻田右左男 (S8)
河池 貫一 (S16)
船越 謙策 (S18)
大西 青二 (S21)
中山 修一 (S24)

<お知らせ>

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は談話会事務局までご一報下さい。

(数字は卒業年、敬称略)

都子 壘 (S15)
今井 平八 (S19)
田島 渡 (S23)
出原 遵乗 (S34)
野田 茂生 (S36)
林 洋子 (S40)
岡本 靖一 (S42)
石角 剛 (S45)
山田 憲子 (S45)
福田 新一 (S46)
池内麟太郎 (S48)
西沢 仁晴 (S49)
生田 博文 (S51)
長谷川正雄 (S52)
遠藤 正雄 (S53)
山口 一郎 (S55)
山下 和久 (S57)
松本 弘史 (S58)
尼子 雅一 (S62)
堀 正 (S62)

加藤 典嗣 (S63)
新谷 泰久 (H2)
岩部 敏夫 (H3)
小口 稔 (H3)
石村 裕輔 (H4)
渋谷 良治 (H4)
糸原 健 (H5)

【編集後記】

今年は、地理学教室創設 90 周年記念という
ことで、かつて教室の運営に携わられた
4名の先生方に寄稿していただきました。
頁数も例年のおよそ倍に増え、たいへん内
容の濃い談話会報となったのではないで
しょうか。

なお、編集作業の方が一向にはかどらず、
会報発行が例年以上に遅れてしまったこと
をお詫びします。

編集 祖田亮次
門井直哉
真木智子

発行日 1997年7月13日
発行者 地理学談話会
〒606 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部地理学教室内
TEL 075 (753) 2793